（二）先史時代の山科

山科では中臣遺跡などの調査により、後期旧石器時代から、人の営みがあったことが分かっています。ではそれ以前の山科はどんなところだったのでしょうか。

更新世と呼ばれる百八十万年前から一万年前にかけては、氷期と間氷期が激しく繰り返す「氷河期」の時代がありました。その結果、海水面が変動することにより、海岸線の位置も変動しています。

京都市は阪神・淡路大震災を機に、地震調査研究のために、反射法地震探査やボーリング探査などの地下構造調査を行いました。その結果、約九〇万年前から、一〇万年に一回程度、何回も大阪湾の海水が、京都盆地を経て山科盆地に侵入し、山科が海であった時代について詳しく分かるようになりました。

図1

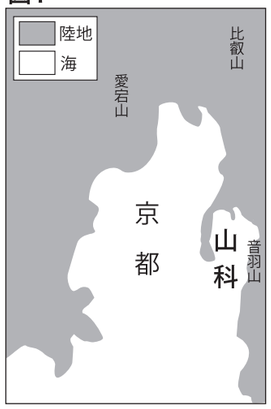


図1は、更新世中期における大阪東部～京都付近の古地理図をイラスト化したものです。山科盆地や京都盆地が海となっており、音羽山や比叡山などの山の部分だけが陸地であった様子がわかります。

表1を見ていただくと、四回にわたって山科盆地が海となっていた時代があったことがわかります。

その後、氷河期も終わり、長い年月をかけて現在の山科盆地の形状ができあがっていきます。

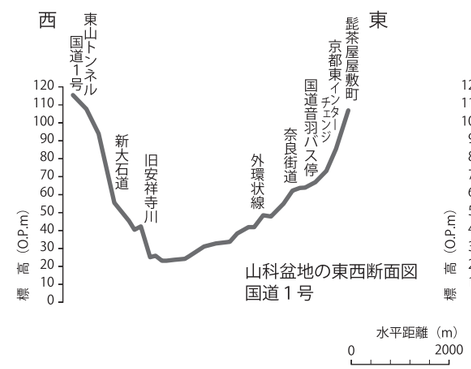
表2をご覧ください。山科盆地は南北方向が南側に、東西方向は西側に傾いていることが分かります。これは山科川の流れによる扇状地が、東から西、北から南へ向かって発達したためと考えられています。川あるところに文明が育つといいますが、山科も古くから川が存在していたため、古代より人類の営みがあったのでしょう。

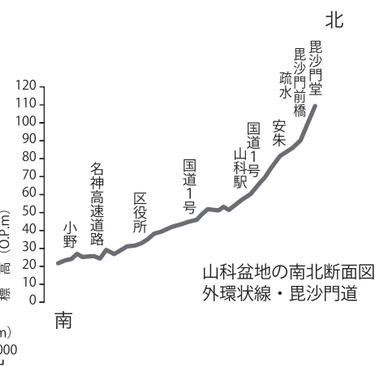
表1

堆積年代		地質単元		地質年代	
縄文時代		海成粘土層（海水侵入時期）		新生紀	第四紀
1万年前		山科盆地で見られる			
後期旧石器時代		沖積層	完新世		
		段丘構成層	更新世		
62万年前		大阪層群			
71万年前					
78万年前					
86万年前					
				新生紀	第三紀
180万年前					

本稿作成にあたり、京都大学大学院理学研究科の竹村恵二教授にご指導を賜ったことをここに御礼申し上げます。

表2 山科盆地の地表面（東西と南北）



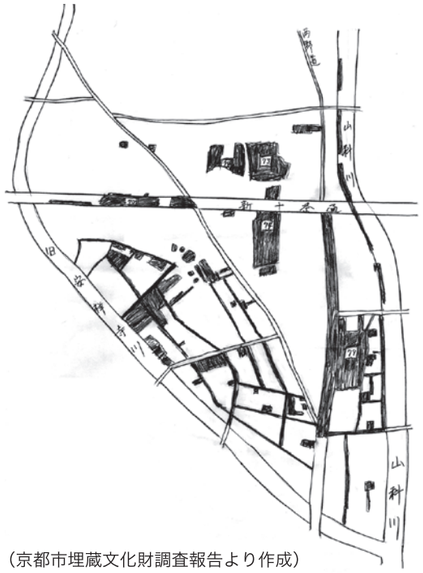


⑦ 中臣遺跡

一九六九（昭和四四）年、洛東高校一年生が弥生時代の土器破片を見付けたことがきっかけとなり、以後八五回にわたる中臣遺跡の発掘調査が行われました。

後期旧石器時代（約２万年前）のナイフ形石器がここで発見されました。
（勧修寺第一市営住宅）
京都市内では一番古いころの遺物で、これほどまとまって発見されたのはこの付近だけです。

遙か昔から人の営みがあった中臣遺跡



（京都市埋蔵文化財調査報告より作成）

その結果、古代には一大集落が存在したことなどを示す大変貴重な遺構遺物が発掘されました。

左図は発掘調査場所を示したものですが、一〇万㎡以上のうち、一〇％程度しか発掘されていません。

縄文時代以前については、数箇所で遺物を包含する土層や、貴重な遺物が見つかっています。

弥生時代中期の墓、方形周構墓や、弥生時代中期から古墳時代前期の竪穴住居が見つかっています。出土品からみて近江地方との深い関係が注目されています。

ところが古墳時代中期になると何故か遺構・遺物とも極端に減少しています。

再び大きな集落となるのは、六世紀中頃から後半以降の古墳時代になってからです。

五世紀後半頃から七世紀初め頃にかけては、方墳や円墳などの古墳や木棺墓・土棺墓が築かれています。

古墳の一部は宮道古墳、稲荷塚古墳などの名称で呼ばれ、中臣十三塚古墳として現存しています。

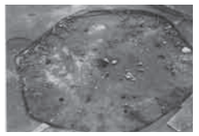
勧修小学校西門の前には、中臣遺跡の碑が建っていますが、勧修小学校の発掘調査は行われていません。

縄文時代の墓

煮炊きに使っていた土器を棺に使用

縄文時代後期・晩期の墓

竪穴住居（たてあな）



弥生時代の竪穴住居

古墳横穴式石室

古墳時代の横穴式石室

⑧ 芝町遺跡

追分の三叉路から奈良街道沿いに南に進み一筋目を東に入ると、北側に「諸羽神社・若宮八幡宮御旅所」があります。

この地域の古い遺跡は「芝町遺跡」で、京都市の『遺跡地図台帳』によれば、四ノ宮（奈良野町・芝畑町）・音羽（珍事町・平林町）・小山（神無森町）にかけて遺物（縄文・弥生・奈良）が発掘されています。

昔から神聖な場所として守られてきました。縄文時代の遺物が発見されていますが、遺構は発掘されていません。

その跡に、二社の「御旅所」が設けられたと考えられます。この御旅所の祭祀が、古代信仰の原始的形態とも言える磐境（いわさか・いわくら）を中心したものであるともいわれ、大事な意味をもっています。

一四七七年には、「山科七郷」としてこの地域の神無森（かんなもり）に郷中関（関所）を設けています。